100字小説
短…短…短編小説

君島恒星

はじめまして…目次…

はじめまして
自分と違う世界を覗いてみたいと思ったことはありませんか？
ちょっと小さな創作の世界に入ってみるのもいいかもしれません。
小さなドラマが小さな刺激になりますように！

目次

「パパの願い」
「7時41分始発電車」
「車内座席確保」
「グルメな…」
「最終電車の宴」
「消防訓練は嫌いだ」
「犬小屋」
「殺意」
「彼女のヒゲ」
「手作り弁当」
「花束」
「指の想い出」

パパの願い

「パパの願い」

「早めに、ひな人形片付けといてね。婚期逃しちゃうわよ」
とママに言われ、ひな祭の後、片付けるふりをして、押し入れの奥に飾っておいた。
「いつまでもパパのところにいるんだよ」
小さな娘への、小さな願いだった。

７時４１分始発電車

「７時４１分始発電車」

通勤に花が消えた。
３年間、７時４１分の始発電車に乗っていた女子高生が卒業したからだ。
お互い話した事はないが、意識はしていた。
寂しく始発に乗り続けていると、突然の喜び。
今日、制服でない彼女が列に並んだ。

車内座席確保

「車内座席確保」

電車の座席に余裕のある所を狙って、身を滑り込ませた。
身体を狭い空間に押し込む。
隣の男が睨みつけた。
かまわず肩を入れる。
両隣の人が少しづつ腰を浮かす。その隣も動いた。
一番端の男が、様子を窺う。
座席確保！

グルメな…

「グルメな…」

冬眠から醒めたばかりの蛙が、道路で車に轢かれていた。
内蔵が飛び出し、そそられる光景だが、そんな蛙にはもう手を出さない。
隣のゴミ袋に隠された、マヨネーズに群がる。
だって、我々はグルメなカラスなのだから。

最終電車の宴

「最終電車の宴」

最終電車に座ると、宴が始まった。
目の前には、吊り革にぶら下った骸骨おやじの踊り。
今にも吐きそうな奴が隣で前後にリズムをとる。
くっついたままのアベック。
座り込む若者。
わたしは寝たふりをして宴に参加した。

消防訓練は嫌いだ

「消防訓練は嫌いだ」

消防訓練は嫌いだ。
「火事だ！」
消化器のピンを抜きレバーを握る。
「消火不能！」
屋内消火栓を延ばす。
「放水開始！」
消防訓練時、何故かヘルメットをかぶる。
このヘルメットが私には似合わない。
消防訓練は嫌いだ。

犬小屋

「犬小屋」

息子の希望で柴犬を飼うことになった。
僕が子供の頃、ねだって飼ってもらった犬は、世話もしなかったのに、なついていたっけ…
　　手作りの犬小屋の陰に、あの頃の犬が恥ずかしそうに覗いた。
幻…
二匹は鼻をくっつけた。

殺意

「殺意」

嫉妬に狂った凶暴男が、わたしを殴る。
口の中を満たす血の苦さ。
殴った後、優しくなる男…
でもまた殴られる。
繰り返し…
その優しさだけに、すがれない。
他の安らぎ求めるわたし…
変わらない。
あの男が消えなければ…

彼女のヒゲ

「彼女のヒゲ」

僕の彼女にはヒゲが生えている。
濃いりっぱなヒゲではなく、産毛だけど、キスをするたびに幻滅する。
ヒゲのことを言うと怒るくせに、剃ろうとはしない。
剃らせる妙案はないだろうか？
今日もヒゲが僕を呼んでいる。

手作り弁当

「手作り弁当」

手作り弁当は恐怖。
彼女の笑顔とともに差し出される、手作り弁当…思わず笑顔が引きつる。
覗き見した台所は汚く、ホコリまみれカビだらけだった。
甘酸っぱい味しかしない。
吐き気を押さえるのが、やっとなのだから…

花束

「花束」

送迎会では上半身が隠れるような花束を、つくり笑顔で抱きしめた。
自宅に戻って、花束を床に投げ付ける。
寿退社じゃないのに…
上司との不倫、ミスのなすり付け、いじめ…それから逃げただけ。
もう一度花束を蹴った。

指の想い出

「指の想い出」

私には人差し指がない。
小さい頃、通り魔に切り落とされたそうだ。
今、その指を探している。
あの頃の幼さが残る指を…
泣き叫ぶ、子供の指を切り落とす。
ああ、子供の指じゃ駄目だったわ…成熟した女の指でなくては…